

65. 若年者における 原発性肺癌: 佐藤新太郎, 池田貞雄, 岡田慶夫 (京都大胸部研胸部外科)

昭和27年以降昭和43年末までに, 京大胸部研胸部外科およびその関係施設において取扱った原発性肺癌は853例である。そのうち, 40歳以下のいわゆる若年者肺癌に属するものは41例 (男子27例, 女子14例) であって, 全症例の4.8%に相当する。われわれは, それらの症例について臨床的ないし病理学的に観察し以下の結論をえた。

1) 原発性肺癌は20歳以下の若年者においてもみられ, われわれの施設においても2歳の男子に発生した原発性肺癌を経験した。

2) 肺癌症例の男女比を年齢階層別にみると, 35歳以下では各年齢層において女子が男子とほぼ同数か, あるいはそれを凌駕している。それに反して, 36歳以上では男子が女子に比べて圧倒的多数を占める。このような事実から, 35歳前後を境として, それ以上の年齢層にみられる肺癌とそれ以下の年齢層のそれとの間には, 発癌因子その他に何等かの差異が存在するようと思われる。

したがって, 若年者肺癌を35歳以下の年齢層のものに発見した肺癌とするのが妥当と考える。

3) 組織学的にみても, 35歳以下の肺癌では, 男女ともに腺癌が優位を占めているが, 36歳以上になると男子では扁平上皮癌が多くみられるようになる。このような事実も35歳前後を境にして, 肺癌の発癌因子その他に何等かの差異があることを裏書きしているように思われる。

4) 35歳以下の若年者の肺癌22例中, 切除術をうけたものは12例で, 切除率は他の高年齢層のそれとほぼ同様である。

5) 35歳以下の肺癌症例の切除後の生存率は症例数が少ないために統計的に処理することは無意味である。しかしながら, 切除後12年間生存している1例を筆頭に, 9年生存2例, 6年生存1例という成績は, 若年者肺癌に対する手術成績が従来考えられていたほど悲観的なものでなく, むしろ良好であることを示している。

6) 若年者肺癌に対する手術成績がかなり良好であるのは, 同年齢層においては高年齢層に比べて集団検診等の健康管理が行きとどいているためと思われる。しかしながら, 若年者肺癌の中に生物学的悪性度の低いものが従来考えられていたよりもはるかに多く含まれていることも考慮すべきである。

66. 小型肺癌の外科的治療経験: 中村 譲, 渡辺義雄, 中川元治, 内田雄三, 富田正雄, 辻 泰邦, 窪田英佐雄, 本多静也, 阿保守邦 (長崎大医第1外科)

教室で経験した小型肺癌径 2cm 以下の症例の手術経験を中心に, 手術後の予後および癌進展形式について, 組織学的に検討した結果について報告する。

これら症例の組織像は, 扁平上皮癌, 腺癌が相半ばし, 臨床的に気管支閉塞による二次的感染を来とし, 化学療法による肺炎像消失後, 小型肺癌が発見されていることから, 小型といえども, 気管支閉塞による二次感染を来たすことを知った。

さらに手術時小型といえども肺門, 縦隔リンパ節の癌侵襲をみとめたものは68%であり, リンパ節廓清の必要性を痛感している。

また2例に術後9カ月および1年6カ月後に, 肋骨および脳転移をいずれも腺癌症例にみとめており, さらに肋膜侵襲をみとめた1例に pleuropneumectomy を施行し, 現在経過観察中の症例がある。

以上の症例につき, 摘出標本のリンパ管, 血管侵襲を観察したが, 小型肺癌といえども, 大型のそれと大差なく, とくに腺癌においては, 胸腔内臓器への侵襲, 遠隔転移形成は, 小型肺癌にもみとめられ, 小型肺癌は転移形成過程の silent phase を意味するものでないことを強調す。